

第3章 平成5年度山口大学構内の試掘調査

第1節 吉田構内の試掘調査

1 人文学部・理学部講義棟新営に伴う試掘調査

1 調査の経過

吉田構内の南端中央部、人文学部講義棟の北側に、人文学部・理学部講義棟の新営が計画された。本地区周辺は、昭和53年度人文学部校舎新営¹⁾や昭和58・59年度理学部大学院校舎新営および付随工事²⁾の調査により、地下のデータは集積されている。これによれば、当地区は1.0m以上の埋め土と、わずかな旧水田耕土をはさんですぐに地山であると予想された。しかし、過去の調査において旧水田耕土中から遺物が出土していることや、計画された建物床面積が約600.0㎡と規模の大きいことから埋蔵文化財資料館運営委員会は先ず、予定地内の埋蔵文化財の分布状況を把握するため、試掘調査の必要があると判断した。

埋蔵文化財資料館は、平成5年7月13日に試掘調査を実施した。新営予定地は自転車置場として利用されており、調査地点は限定されることとなった。自転車置場を避けて、予定地内に2カ所のトレンチを設定した (Fig.22)。自転車置場に対して西側のものをAトレンチ、北側のものをBトレンチとした。調査面積は約4.0㎡である。

2 調査結果

Aトレンチ 自転車置場の西側、舗装を避けて1.5m×3.0mのトレンチを設定した。調査地点は西側の南北に走る道路から1.5m以上の高さがある。この比高差は丘陵の段状造成以外に、相当に盛り土されているものと予想された。掘削を行ったところ予想をこえて盛り土が厚く、排土が置けなくなったため、トレンチを1.0m×2.0mの大きさに切り替えた。現地表下約1.6mは盛り土で、その直下に茶灰色粘質土 (7.5Y 7/3) の地山を検出した。地山の標高は東壁の20.4mに対して西壁は20.1mであり、西側に傾斜している。

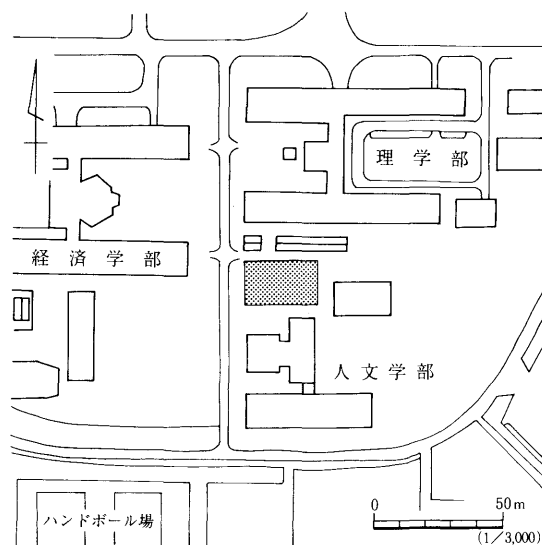
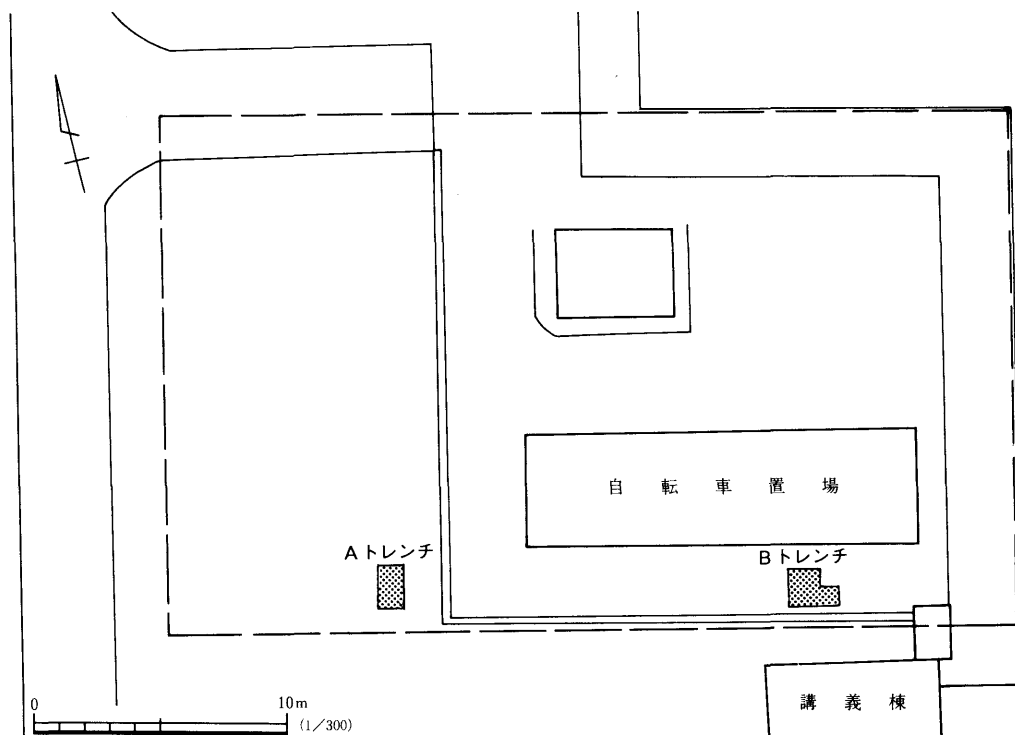


Fig. 21 調査区位置図



(破線が新営予定地)

Fig. 22 トレンチ設定図

Bトレンチ 自転車置場の北側、自転車置場とそれに並行した排水溝との間に2.0m×2.0mのトレンチを設定した。調査地点はアスファルト舗装がされており、アスファルトカッターによって舗装部分を除去した。掘削を開始して、現地表下70cm程で水道管に当たったため、トレンチを南北1.5m×東西1.2mに変更した。現地表下約1.0m、標高20.8mで茶灰色粘質土(7.5Y 7/3)の地山を検出した。地山上面はわずかに、にごっており土師器皿小片を含んでいた。流れ込みによる遺物と推測される。

AトレンチとBトレンチの距離は、わずかに15mほどであるが、地山の比高差は40~70cmもある。西側にいくにしたがって、丘陵が低まっていくものと考えられる。顕著な遺構・遺物は検出されなかった。

[注]

- 1) 山口大学埋蔵文化財資料館「吉田構内人文学部校舎新営に伴う試掘調査」(『山口大学構内遺跡調査研究年報』X、1992年)
- 2) 山口大学埋蔵文化財資料館「理学部大学院校舎新営および付随工事に伴う立会調査」(『山口大学構内遺跡調査研究年報』Ⅲ、1985年)

2 第2屋内運動場施設新営に伴う試掘調査

1 調査の経過

吉田構内の北西部にあって、陸上競技用グラウンドより1段高く立地する体育館やサークル棟の一画に、第2屋内運動場の新営が計画された。新営予定地は第1屋内運動場と第1武道場に囲まれ、陸上競技用グラウンドに面する三角形を呈した空き地である。なお、新営予定地が陸上競技用グラウンドより1段高いのは構内造成の埋め土によるためであり、旧地形をとどめてはいない。本来の地形は陸上競技用グラウンドとの間にさほど比高差がなく、グラウンドや正門周辺と共に吉田遺跡の低地部を形成していたと考えられる。

吉田遺跡の低地部に当たる新営予定地の周辺は、昭和56年度に教育学部音楽棟新営の発掘調査¹⁾、平成元年度に体育施設系給水管改修に伴う立会調査²⁾が行われている。これらの調査では、北東から南西方向に走行する溝群が検出された。出土遺物は少なく時期決定の判断材料を欠くが、溝は幾度も掘削し直されており長期間にわたって機能していたことが判明している。吉田遺跡の低地部にあって、遺物が少なく長期間使用された平行する溝群は、農業用の水路である可能性が示唆された。これにより新営予定地の周辺は吉田遺跡の耕地部分であったと想定でき、新営予定地からは周辺と同様の遺構あるいはそれに付随した遺構が検出されるものと考えられた。

埋蔵文化財資料館運営委員会では上述の所見を重視し、新営予定地内の試掘調査が必要であると判断した。これを受けて埋蔵文化財資料館が、試掘調査を実施した。調査は建物要求範囲(約27.0m×約40.0m)の四隅にトレンチを設定した。なお、調査前より構内造成による相当量の埋め土が予想されていたため、調査による掘削が深くなった場合の2段掘りを想定し、トレンチを6.0m×6.0mと広く設定している。結果的には埋め土以下の堆積が浅く、2段掘りの必要はなかった。調査面積は144.0㎡である。



Fig. 23 調査区位置図

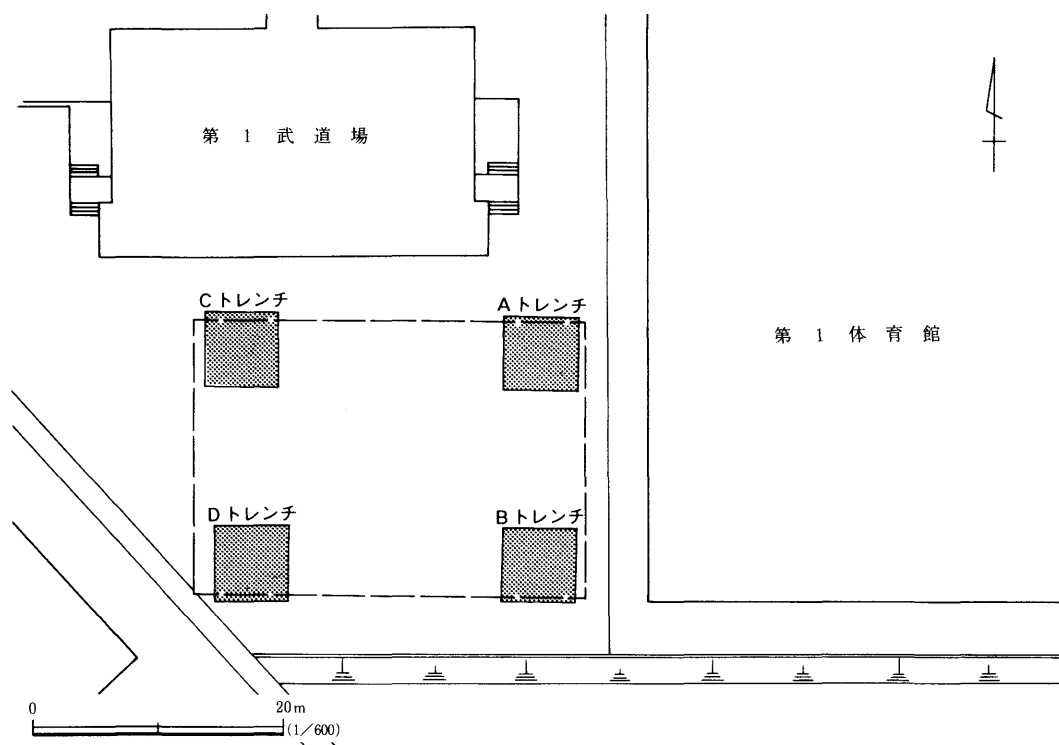


Fig. 24 トレンチ設定図

トレンチの名称は、北東隅をAトレンチ、南東隅をBトレンチ、北西隅をCトレンチ、南西隅をDトレンチとする (Fig.24, PL.15)。Aトレンチから1条の大溝が検出されたが、他のトレンチからは顕著な遺構・遺物は検出されなかった。調査期間は平成5年8月3日から8月18日までである。

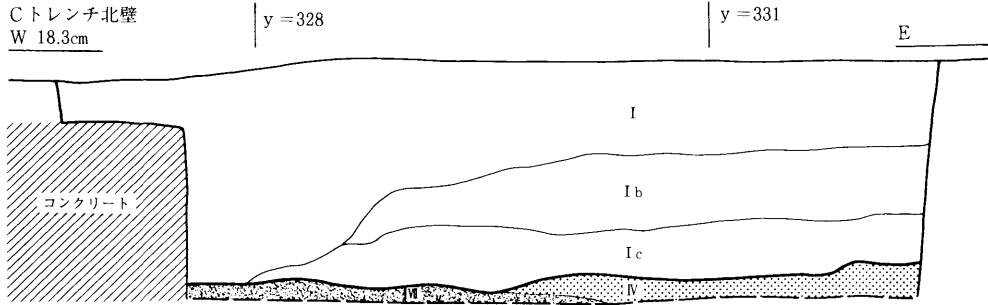
2 層位 (Fig.25, PL.16)

本調査区の基本層序は、次の順である。

- 第Ⅰ層：茶灰色粘質土 (埋め土)
- 第Ⅱ層：褐灰色粘質土 (旧耕土)
- 第Ⅲ層：暗青灰色粘質土 (床土)
- 第Ⅳ層：明緑灰色あるいは青灰色シルト (地山)

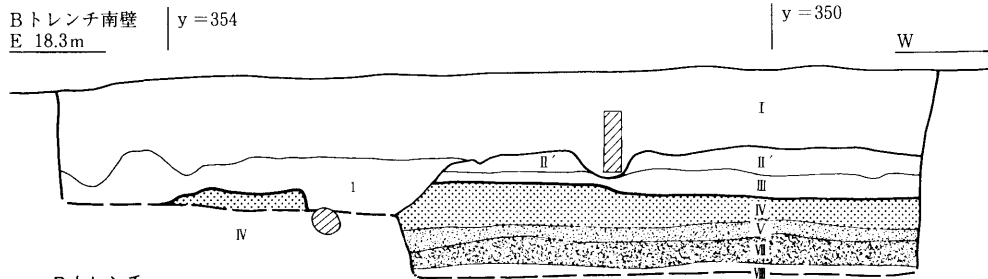
第Ⅰ層の埋め土は、東側で0.6mの厚さであるが西側では1.4mを測る。地形が東から西へ傾斜していたことを示すものである。第Ⅱ層は部分的に削平されている箇所がある。第Ⅳ層の地山の検出標高は、東側で17.3m、西側で16.9mを測る。Aトレンチで検出された本調査区唯一の遺構、大溝は第Ⅳ層の上面で検出された。

吉田構内の試掘調査



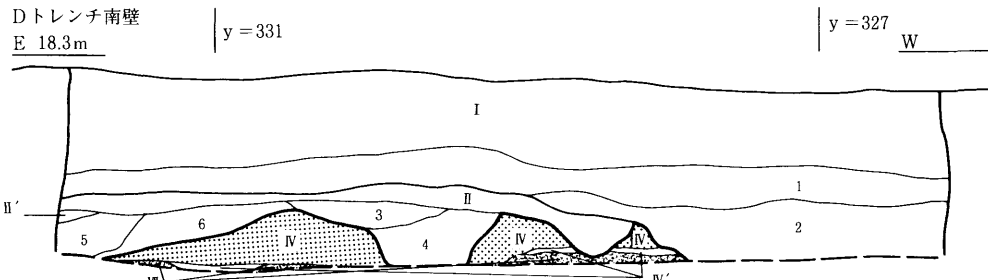
Cトレンチ

- I 茶灰色粘質土(埋め土 I, 7.5Y 7/3) Ic ガレキ(埋め土 Ic) VII 黒褐色粘土(2.5Y 3/2)
 Ib 明緑灰色砂質土(埋め土 Ib, 5G 7/1) IV 明緑灰色シルト(10GY 8/1)



Bトレンチ

- I 茶灰色粘質土(埋め土 I, 7.5Y 7/5) IV 明緑灰色シルト(7.5GY 1/7) VII 暗灰色粘土(5Y 6/2)
 黒褐色(10YR 3/1)
 II' + 明緑灰色シルト(7.5GY 1/7) V 黄褐色粘土(2.5Y 6/3) I 攪乱土
 (旧耕土) VI 黒褐色粘土(2.5Y 3/2)
 III 緑灰色粘土(床土, 5G 5/1)



Dトレンチ

- I 茶灰色粘質土(埋め土, 7.5Y 7/3) IV 明緑灰色シルト(7.5GY 1/7) 1 黄褐色粘質土(赤土, 10YR 8/6) 4 暗灰色粘土(5Y 3/1) (1/50)
 II 褐色粘質土(旧耕土, 10YR 6/1) IV' 明緑灰色砂(7.5GY 1/7) 2 攪乱土 5 暗緑灰色細砂(10G 4/1)
 黒褐色土(10YR 3/1) VII 黒褐色粘土(2.5Y 3/2) 3 浅黄色シルト(2.5Y 7/4) 6 黄灰色粘土(2.5Y 5/1)
 II' + 明緑灰色シルト(7.5GY 1/7)
 (旧耕土)

Fig. 25 B・C・Dトレンチ土層断面図

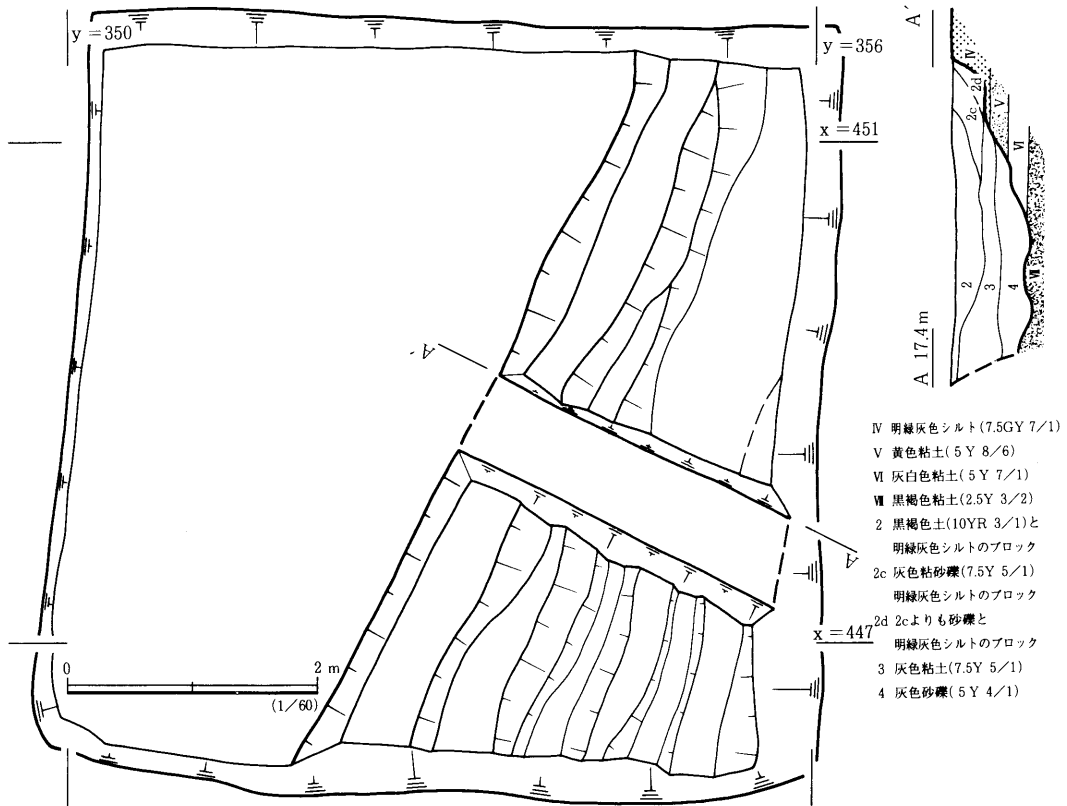


Fig. 26 Aトレンチ大溝実測図

3 遺構

Aトレンチで、北東から南西方向に走行する大溝の西肩を検出している (Fig.26,PL.17)。検出面の標高は17.3mである。東肩は調査区外にあるためその溝幅は確かではないが、溝底中央をもって西肩を反転させると約4.0mの溝幅が想定される。溝断面は2段あるいは部分的に3段掘りの逆台形を呈し、その深さは検出面より溝底まで約60cmを測る。溝底の標高は16.7mである。溝の埋積土は4層からなる (Fig.27,PL17)。第1層は明緑灰色シルトのブロックを含んだ黒褐色土、第2層は灰色粘土、第3層は灰色砂礫、第4層は灰黒色細砂であった。第3層以下の砂礫は、本溝に流水があったことを示すものである。

他のトレンチでは、近・現代の遺構が検出されている。Bトレンチからは北東から南西方向に軸をもつ、近代の暗渠を検出した。Cトレンチの南東隅では、幅約1.0mの北東から南西方向に軸をもち、黒褐色粘質土を埋積土とする小溝を検出している。大部分はトレンチ外に広がるため、上面の検出のみにとどめた。Dトレンチからは、大学統合移転直前まで機能していたと考えられる南北方向の水路が検出された。

吉田構内の試掘調査

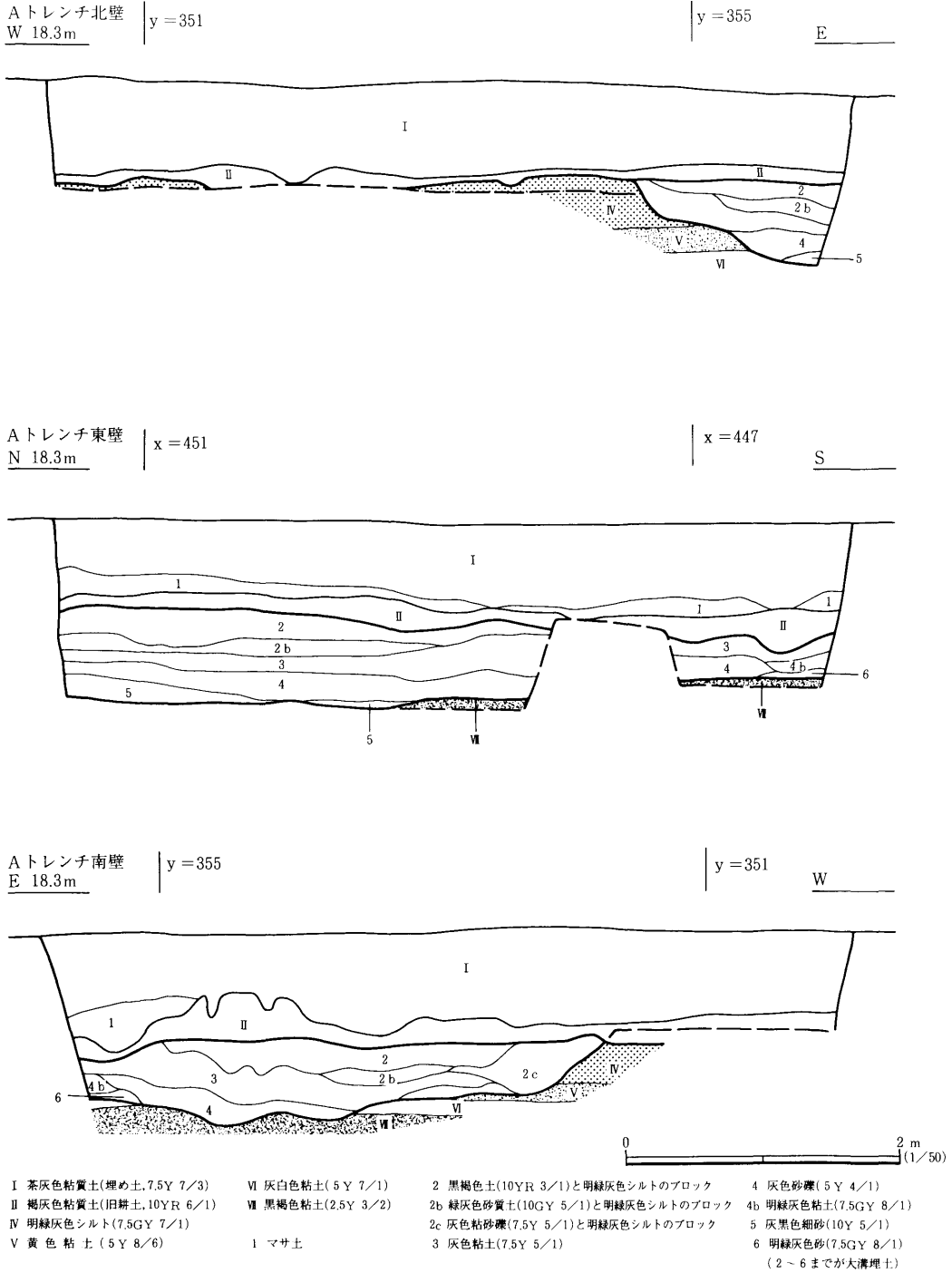


Fig. 27 A トレンチ土層断面図

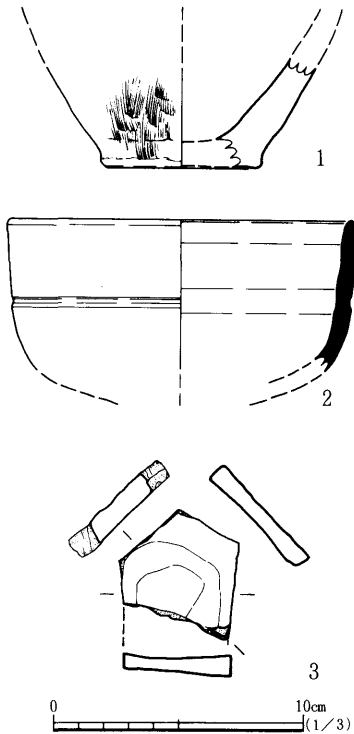


Fig. 28 Aトレンチ大溝出土遺物実測図

4. 出土遺物 (Fig.28, PL.17(4))

Aトレンチの大溝から、弥生土器・須恵器・砥石などが出土している。その数量は極めて少なく、破片も小さい。図示しえたのは、以下の3点のみである。

1は弥生土器甕の底部である。復元底径約6.0cm。平底であるが、底面がわずかにくぼむ。外面はタテハケ後ナデ調整、内面はナデ調整を施す。器壁はやや厚く、底部付近で約1.5cmを測る。2～3mm前後の砂粒を混じえている。前期に所属すると思われる。

2は須恵器の坏である。復元口径約14.0cm。口径に対して器高が高く、碗状を呈した坏である。口縁端部は丸く、胴部には一条の凹線がめぐっている。高坏の可能性もある。焼成が不良で、器面の風化が著しい。中村浩³⁾氏の陶邑編年³⁾というⅢ型式1段階のものと考えられる。

3は砥石である。2面の研砥面をもつ。現存長約4.4cm、最大幅約4.7cm、最大厚約0.85cmである。

5 小結

今回の試掘調査で検出した顕著な遺構は、Aトレンチの大溝のみであった。この大溝は一部が検出されたにすぎず、今回の試掘調査では溝の規模を明らかにしえなかった。また、大溝は延長方向にあるBトレンチから検出されておらず、新営予定地外の東側に折れるか、トレンチが設定されていない新営予定地中央を流れていた可能性がある。大溝からは弥生土器、須恵器など出土しているが、大溝の機能期間を決定しうる資料ではない。

[注]

- 1) 山口大学埋蔵文化財資料館「教育学部構内H-16区の発掘調査」(『山口大学構内遺跡調査研究年報』、1982年)
- 2) 山口大学埋蔵文化財資料館「体育施設系給水管改修に伴う立会調査」(『山口大学構内遺跡調査研究年報』IX、1991年)
- 3) 中村浩『和泉陶邑窯の研究－須恵器生産の基礎的考察－』(柏書房、1981年)

3 農学部給水管埋設工事に伴う試掘調査

1 調査の経過

吉田構内の中央やや東よりにある農学部校舎、その南側に給水管の埋設が計画された。発掘調査が行われた本部裏給水管と同じ、平成5年度の基幹整備事業によるものであるが、農学部給水管の工事は支管のため、幅約80cm、現地表下70cmまでの掘削であり、本部裏の本管に対しやや小規模な掘削が予定されていた。本地区周辺は過去の調査から、遺構の密度が比較的薄いと考えられる地域であった。また、構内造成時の埋め土が厚く、給水管程度の掘削では旧表土層に及ばないことも予想された。しかし、給水管埋設の管路は約140mにも及ぶ長大なものであった。

上記の内容を踏まえて、埋蔵文化財資料館運営委員会はまず、管路予定部分の埋蔵文化財の分布状況を把握するため、試掘調査を実施することとした。また、顕著な遺構・遺物包含層が検出された場合には、再度、同委員会においてその取り扱いについて協議することとした。この決定を受けて埋蔵文化財資料館が、試掘調査を実施した。

調査は管路予定部分について3.0m×1.0mのツボ掘りを数多く行う予定であったが、樹木や道路などの障害物に阻まれた。そこでまず、調査可能な3地点についてツボ掘りを行い、必要に応じて調査地点を増やすこととした。調査の結果、他地点の追加調査は必要なかった。3地点は西側からAトレンチとし、最も東側をCトレンチとする（Fig.30）。調査期間は平成5年10月21日から22日までで、調査面積は9.0㎡である。

2 調査結果

Aトレンチ 現地表下約50cmでバラス及び瓦礫を含んだ整地土層の上面を検出したが、これより下は機械力をもってしても掘削が困難となった。その状況より、工事掘削深度の70cmまで整地土層の及ぶことが想定されたため、整地土層上面で調査を中止した。

Bトレンチ 現地表下70cmの範囲は、埋め土であった。しかし、現地表下80cmにおいて、調査区の東側で明緑灰色シルト（10GY 8/1）の地山が検出された。

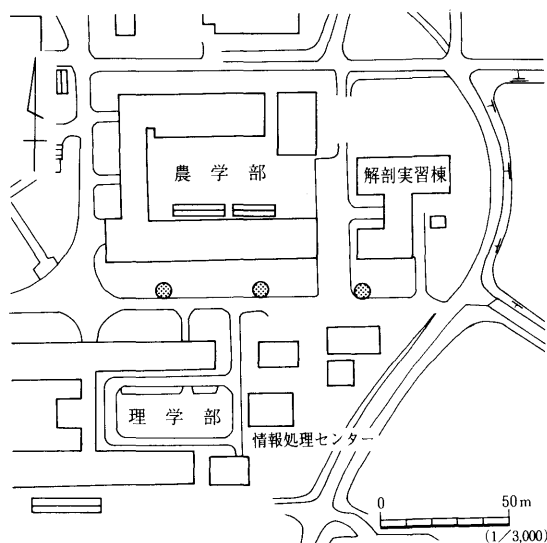


Fig. 29 調査区位置図

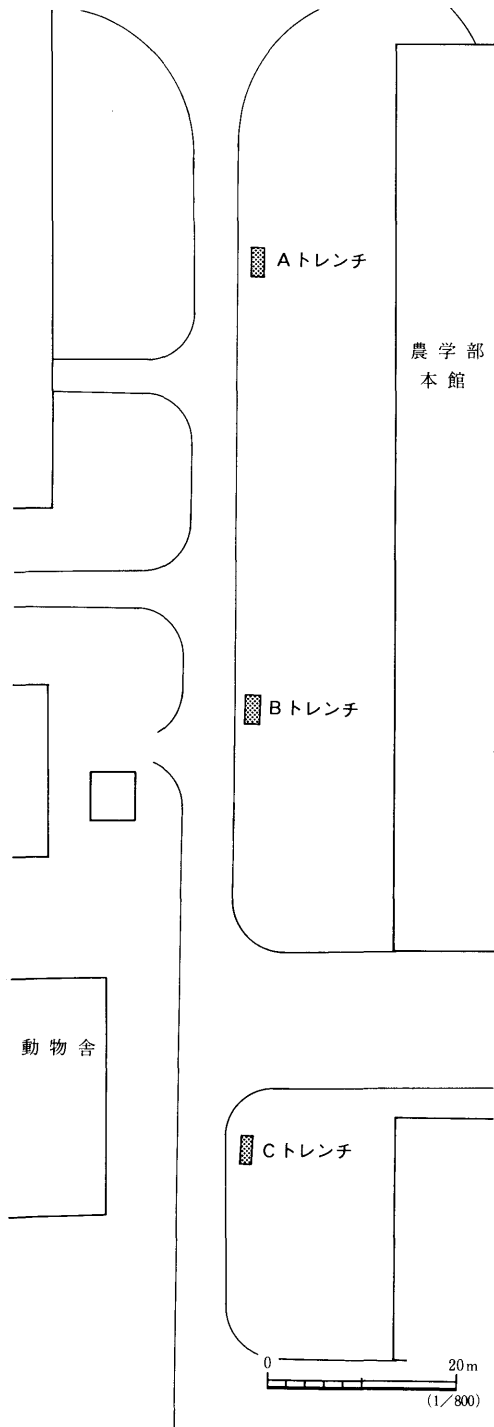


Fig. 30 トレンチ設定図

地山検出面の標高は20.6mである。なお、西側では埋め土が現地表から80cmよりも下に及んでいる。おそらく、AトレンチからBトレンチの周辺は構内造成時の埋め土などが厚く客土されており、給水管埋設による埋蔵文化財への影響は考えられない。

Cトレンチ 農学部解剖実験棟の南側に設定したこのトレンチは、他のトレンチと比較して構内造成の影響をさほど受けておらず、地表下に旧耕土層が残されていた。旧耕土層下には、厚さ約20cmの暗灰色砂礫層 (N 3/) を検出した。この暗灰色砂礫層下、標高20.9 mで地山の黒色粘土 (10Y 3/1) を検出した。本地区は平成3年度に調査した連合獣医学科棟の縄文河川跡²⁾に近く、暗灰色砂礫層がその河川跡の氾濫によって形成された可能性もある。遺物の出土はなかった。

3地点の調査結果は、本地区は埋蔵文化財が希薄であり、埋存するとしても掘削範囲は、埋め土や旧耕土層のため、給水管埋設工事の影響が及ばないことを明らかにした。

[註]

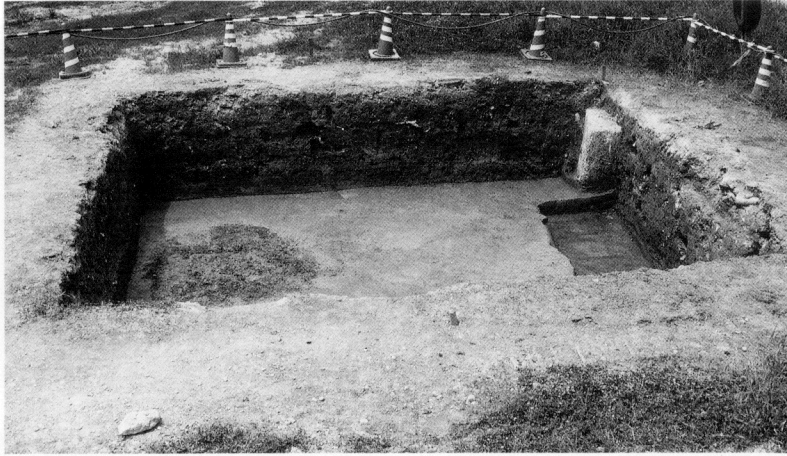
- 1) 山口大学埋蔵文化財資料館「昭和56年度山口大学構内吉田遺跡の調査」(『山口大学構内遺跡調査研究年報』、1982年)
- 2) 山口大学埋蔵文化財資料館「吉田構内農学部連合獣医学科棟新営に伴う発掘調査」(『山口大学構内遺跡調査研究年報』XII、1994年)



(1) Aトレンチ全景（東から）



(2) Bトレンチ全景（東から）



(3) Cトレンチ全景（東から）



(4) Dトレンチ全景（東から）

吉田構内第2屋内運動場施設新営に伴う試掘調査 (1)



(1) Aトレンチ北壁土層断面



(2) Bトレンチ南壁土層断面



(3) Cトレンチ北壁土層断面



(4) Dトレンチ南壁土層断面



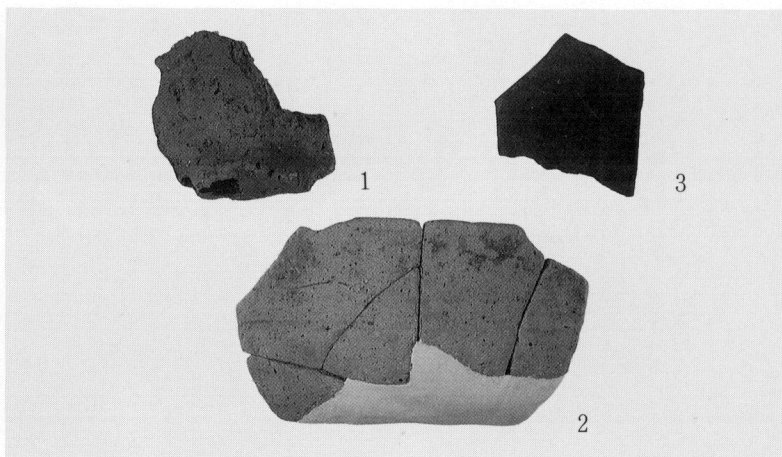
(1) 大溝全景 (東から)



(2) 大溝全景 (南から)



(3) 大溝土層断面 (北から)



(4) 大溝出土遺物

(3) 吉田構内第2屋内運動場施設新営に伴う試掘調査